

訪問看護師がキーパーソン

シンポジウム「この町で健やかに暮らし、安心して逝くために」が1月、東京都新宿区で開かれた。くも膜下出血後の女性を看取った娘、支えた訪問看護師、施設スタッフ、歯科医らが登壇。女性が胃ろうを付けながら経口摂取を取り戻し、家で過ごすまでの約6年を振り返った。関係者の許可を得て、示唆に富むチームワークをお伝えする。(佐藤好美)

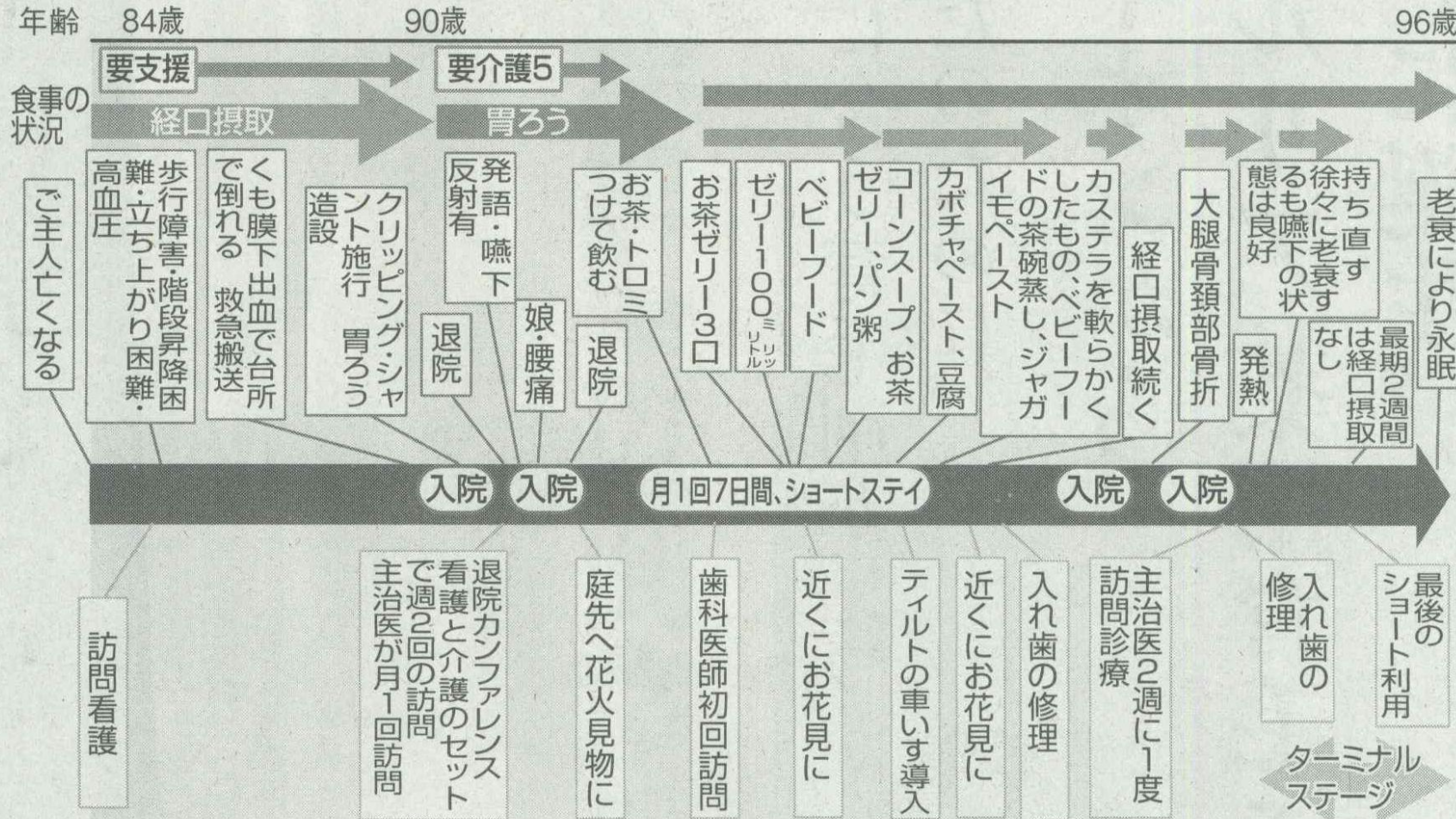
東京都新宿区の鈴木久子さん(仮名)は昨年11月、老衰のため自宅で亡くなった。96歳。同居の娘、小島加代さん(64)は「大変なときもあったけれど、終わってみるとすごく良かった。心残りが無い」と言っていた。心残りが無いと言った。心残りが無いと言った。心残りが無いと言った。

●訪看と主治医

夫の死亡後、要支援になつて訪問看護が入っていた久子さんだったが、本格的な介護が必要になったのは96歳のとき。くも膜下出血

「96歳要介護5」を家で看取る

久子さんの状態の推移



で倒れ、要介護5で、ほぼ寝たきりに。手術後、胃に直接管を通す「胃ろう」を打診された。久子さん自身

は常々、「倒れたら何も出来ないで」が口癖。だが、病院側から「リハビリするにしろ、胃ろうの方がいいですよ」と言われ、家族も同意した。だが、リハビリは始まらない。「だったら家に帰ろう」となった。

加代さんは「帰宅に不安はなかった。父を看取ったときも訪問看護ステーションが頼りになった。昔からの主治医も近くにいるし」と言う。だが、病院側は要介護5で胃ろう、96歳の高齢患者の帰宅を考えると難しい様子。母子の帰りたい気持ちを酌んで加勢したのは、早期から久子さんの看

護に入っていた「白十字訪問看護ステーション」だった。訪問看護師が口添えし、久子さんは帰宅した。戸原准教授は「脳血管疾患後は高率で嚥下障害が起きるが、急性期が過ぎると嚥下反応も回復してくる。みんなが口から食べられるようになるわけではないが、練習はできる。自己流は危険だが、場所や状態が変化したときに専門職が再評価すれば、チャンスはある。食べることを諦めること

ではない」と話す。サポートは口の中だけでいい。車椅子に乗ると吐くようになる。戸原准教授は「座ると腹部が押されるのでは」と指摘。背もたれと座面が倒れる「ティルト・リクライニング」を提案した。介護保険で使い始める。吐き気は止まり、久子さんは再び外出できるようになった。

●最期の1年
最期の1年はやせてきた久子さん。加代さんは「ふくよかだった母の体の肉が落ち、おむつのサイズがしからMになっていった。そろそろかなと思った」と言う。寝ている時間が増え、2日に1度くらい覚醒する。経口摂取はなかったが、湿らせた介護用手袋で指を口に入れると吸う。加代さんは「最後まで喉が湿かずに逝けたかな」と振り返る。その日の朝、秦看護師らが訪問。「家を継ぐ人がいて安心ね」と声を掛ける。久子さんはふっと目を開け、表情を見せた。「『いいえ』と言っているようでした」(加代さん)

医療機器利用者 難航するショート探し

介護者が介護の息抜きをするショートステイ。しかし、胃ろう、在宅酸素、バルーンカテーテルなどの医療機器を使う人は、なかなか受け入れてもらえないのが現実だ。加代さんが腰痛を発症したとき、久子さんは主治医の診断もあり、新宿区が区内3カ

所の病院に確保する在宅患者用の緊急病床を利用した。以後、月1回7日間のショートステイを計画した。だが、胃ろうの久子さんを受け入れるショートは少ない。白十字訪問看護ステーションの責任者で看護師の秋山正子さんは「久子さんにとって、シ

ョートは外の風を感じられるわずかな機会。家族を休ませながら在宅なのに、胃ろうの人を受け入れるショートは区内では経験上、1カ所しかない。胃ろうの人が増えているのに在宅の選択肢が示されないのは問題だと思ふ。施設と顔の見える関係を築きながら

一緒に考えて、少しずつ枠を広げていきたい」と訴える。久子さんをショートで受け入れたのは特別養護老人ホーム「原町ホーム」。生活相談員、前田千紗子さんは「服薬や薬の塗り方など、いつも看護師さんに確認し、詳しく指示をもらって対応した」と言う。シンポジウムには、約20年前に先駆的に栃木県で訪問診

死ぬときは1人

大阪府河内長野市 城林きぬ子(72)
孤独死がとてかわいそうなののように言われます。1人で死ぬと、後から親族があれこれ言われます。子供が数日おきに来ている、

帰った直後に親が倒れ、発見されたのが3日後だと、「3日間もほったらかしで」となります。でも、人生は生きるも死ぬも1人ではないかと思ふ。人さまに迷惑を掛けずに死ぬと最高です。1

人で逝くのがそんなに悪いことかしら、と不思議で仕方ありません。子供が独立して離れていく、親も夫婦2人でその後の人生を満喫するのが、今の世の中。夫婦のどちらかが死を迎えれば1人になる。そうなれば孤独死の可能性が生じる。それをとやかく言うなら子供の後を追って離れずにいなければなりません。

子供は気がかりでしょうが、老夫婦なりに楽しませてもらっているのではないのでしょうか。子供がいても孤独死するときはするし、子供がいなくても見守られて死ぬ人もいますし、死ぬときの気持ちは分からないけれど、どんな偉い人も貧しい人も、平等につくってもらっているもんだな、と思ふ。